

講習会を終わって

周 郷 博



はじめに

四日間、私が思い悩んできていた教育、特に、出発点の幼児教育について、さっきの大石さんまで含めて、私が言おうとしていることは全部でできたと感じます。そういう感じがするでしょう。だからもう、演出がよかったんで、あとは話す必要がないんです。そしてどういうわけか四人ともおのずから一つの共通の問題にふれながら教育の焦点をはっきりさせることになったと思うんです。

大石さんも、言葉の問題が出てきました。子どもが最初に聞く言葉がいかに大事かということ。そしてその中に地球全体を含んでいるものの考え方というのが、その最初の言葉の中に、すでに入っているというあれね。そういうことも一日目の外山さんの母なる言葉と対応して出てきました。

大きな時代の変わり目になると教育の専門家はもはや役に立たないんです。教育の素人の考えが全部いいわけじゃないけれども、教育の専門家という閉じ込められた世界にいる人にはわからないことがたくさんあるんで、教育の中にもぐり込んでしまった人たちではもはや、この壁は破れないんだということです。今回四人の人間が教育の外側にいて、われわれがどこでどう壁を破るべきか、どこで教育をもっと広い展望を持つ所へ行けるかと考えていたところ、教育の外にいる人によってわれわれの中にあつた自分では破ることのできなかった壁が破れてきているということを感じます。

大石さんの話から——意識の改革

先ほどの大石さんの話で、私たいへん感心して聞いていたのはね、日本は本当にゴミだらけの国です、目に見えるゴミだけ

じゃなくて、精神的なゴミも多くて、あのゴミの中にうもれていくような状態にわれわれの心はなっています。しかし、大石さんのあの optimism、やれば日本の自然もきれいになると確信していることは、私感心しましたね。だから最後に大石さん、明るい心で生きなさいと言いましたけれど、明るい心にもいろいろあるんでね。これなんか日本語じゃちょっと言いようがないから、optimism ですよ。やれば、何年かたてば日本の自然はきれいになる。きれいな川や小鳥の声が戻ってくれば日本人の心もきれいになるだろう。そして天皇制の時代とは違った意味で人類につながるような、人類公共のものを大切にして、人類との連帯感、自分一個だけの問題じゃなくて今とは変わった意識の革命が生まれてくるだろうと、大石さんが信じていることは、私には大変救いになるように感じられました。

最初に大石さんは意識の改革と言いました。役人はいくらたぐさん作ってもだめなんだ。それから法律で罰金をとってもだめなんだ、という例をあげましたね。やっぱり任人というか国民の意識の改革が、別のことばで言えば意識の変革が必要なんだ、制度とか法律というふうなものも助けにはなるが、基本的なものとは意識の変革なんだ、というふうに言われました。それから、大石さんが最後に言われました両親の自信のなさ、もう明日はないような顔をして生きている両親が多いわけだけ

ど、やはり両親も含めて意識の変革だね。それを僕は連帯感と言ってもいいと思うんです。愛ということもうまい言葉で大石さんらしく言いましたけれども、公共道徳、公共の社会の共有物があるいは人類の共有物を、まさに環境会議の言うかけがえない地球だという問題になるわけです。これがだめならば全部だめになっちゃうわけですから、自分のことばかり考えてもだめなわけです。日本の自然環境も、それから精神的な環境もみんな自分のことだけを考えている限りよくなる望みはないわけです。ぼくはその意識の変革ということが、現在の家庭から、地域の住民、それからもちろん有力な地位にある企業家から政治家から、全部含めて意識の変革を行なうことが教育の核心なんだと思います。それをぬきにした教育というものは、なくてもいいというよりも、あれば有害だという教育だと僕は思います。

崇高なもの

ちょうどきのう学士会の月報を送ってきていて、そこにも大石さんが、昼食会かなにかで話した、ストックホルムの環境会議かなにかで考えたことがでていましたけれど、その中で、人類は今やイデオロギーとか企業家の損得とかいうものを離れて、かけがえない地球という、この人間の環境を本気で考えるよ

うになったというのは、崇高なものだと言っているんです。ぼくらの心に欠けているのは、この崇高なものなんです。テレビもいっぱいあるし番組も詰っている、本もたくさん出版されているし、大学もたくさんある。幼稚園もたくさんあるけれど、しかし、われわれに崇高なものがあるでしょうか。子どもを子どもらしくしていくものは、この崇高なものです。

中国の毛沢東の文化革命以後に言っている言葉はもちろん前と連続していますけれど、絶対無比の精神と、人民に奉仕する精神というね、毛沢東が中国の若者たちに、もちろん大人たちにも教えていて、そして実行されていることなんです……。そういう絶対無比なんて禅みたいに思っちゃいけないんです。絶対無比だからといって、いい気になっちゃいけないんです。絶対無比の精神と人民に奉仕の精神というのは、それは哲学ですけれども、同時にそれは日々の行動にならなくちゃいけないんです。ぼくはそういう崇高なものは、あらゆる教育の中になければ子どもは育つことはできないんだと思います。

愛

大石さんまで含めて四人とも相談したみたいになんと首尾一貫しているでしょう。だからもう、そこに付けたすことありません。ないんですけれども、だからなおのことぼくは言いた

いですけれど。これはもう、つけたしだと思って聞いていただいていいんです。

意識の改革ということが今のヨーロッパで本当にもじめに起こっていることを、このあいだロンドンへ行つて、ルネマリパリさんや何人かの人と一緒に講演会に行つて、そして、みんなで興奮して抱き合ったりしました。日本だとなかたか変になりますね。ぼくは愛というものは、日本人には最もわかりにくいものだという気がするし、今の人にはなおわからなくなっていると思います。やっぱり愛というのはヨーロッパで、清潔な、キリスト的な情熱を根拠にしてあるもので、私はああいうきれいな人に抱かれて、“My dear professor” と言つてあいさつされたのは初めてですけれど(笑)、しかし実にあとの気持ちがいいね、ことば以上でした。

それから、しつけのことですけれど、スイスでぼくはくたびれてしょうがないから、一人でコーヒー飲んでました。そばに男の人がいて、そばに四歳か五歳の女の子がいましたから、たまたま持っていたおみやげを、その女の子にあげました。そしてたらその男の人が、あんたどこから来たのと言いました。そしてたら私は日本へ行つたことがあつて、歌舞伎座も知っているし、イベット・ジローという人と友だちで、私はベルギー人だけども帰らないで世界中を歩いているんだと言いました。大阪も知っ

ていたし、鹿児島も知っていました。

いろいろ話をしました。そこにもう一人女の人がいましたけれども、その人はそうきれいな人じゃなかったけれど(笑い)。そのうち女の子のお母さんが来ました。何か用事をたして帰って来ました。お母さんが帰ってきたので子どもを含めた四人が帰って行きました。

しばらくしてから、その女の子は、あのおじさんにあいさつしてきなさいと言われたと思うんだ。そのかわいい女の子は帰ってきてぼくのほっぺたに接吻しました(笑い)。ぼくは驚いたなあ。興奮したよ(笑い)。だって please と thank you と you are welcome という言葉を小さい時に教えないというのと同じように、ある人が親切にしてくれたらね、やっぱりちゃんとあいさつしなさい、それもきまりきったあいさつじゃなくて、むこうからちゃんと来てね、あんなにかわいい子に……。それでぼくはえらく興奮しちゃったんで、おみやげの中に、日本のこんな紙が入っていたの。それと、伝票と間違えてボーイさんに出してね、これいくらか、これいくらかってきいたの、ボーイのやつ驚いてね(笑い)、そしたら伝票は下に置いてあったよ。あんまりうれしかったのね(笑い)。

だからね、やっぱり清潔な愛というものは、人間を本当に変革してくれるものだと思います。あとくされがなくてきれいな

ね。そういう愛が日本にはまさに少なくなっちゃったと思えます。人は無感動です。無気力です。中国の人は、ヨーロッパの人とは違う愛、キリスト教的な情熱と愛というもので動いているのだと、イギリス人は見えています。中国にはそれはありますね。しかしわれわれにはそれが本当になくなったように思います。

自然

そしてさつき大石さんが言った通りだと思えます。きれいな自然がなければ、日本人が愛というものを学ぶ手がかりがないんですよ。でヨーロッパには、きれいな自然が残っています。リスボイさんという亡命ロシア人で、アメリカの大学の先生をしている人とロンドンで会いましたけど、あのこと思い出になるなあ、ロンドンはどこへ行っても美しい緑も、広い場所も残っています。それから木もきれいに立っています。あれは遊牧時代から美しいああいふ緑の草原があったわけです。イギリス人にとってノスタルジアですよ。そういうノスタルジアをこわさないで持っているんです。イギリスの歴史と切り離すことのできない緑の草原です、それが大都市の中に残っているんですよ。で、広い場所があるわけね。そして、そこを人間の子どもは自転車に乗って走っちゃいけないけども、犬はそこを走って

いいということになっているわけです。日本みたいに、犬も全部つながれているということはありません。犬も全部自由にしています。日本じゃ犬は全部つながれているでしょ。で泥棒よけかなにかで。だからおやじさんもみんなつながっているのに等しいんです(笑い)。子どもも幼稚園につながれている犬のよな感じがしますよ。もっと放したらどうでしょう(笑い)。放す場所が今ないのが困るんですけども。

そして、今度最初に行ったのはデンマークでしたけども。デンマークは白夜でした、朝二時ごろから夜が明けて、十時ごろまで明るいわけです。しかしあのデンマークの農業大学へ行ったら professor と話して、ヨーロッパとはこういうもんだと思いましたがね。デンマークでは非常にこう、日本のビニール・ハウスとは違うんですけども、完全な温室を作って、花をたくさん作ってドイツやイギリスに輸出しているわけです。そしてその professor の言うことに、花というものはかって富裕な家庭で楽しまれていたけども、今やすべての人が花というものを各人の家庭に持たなければならなくなっている。工業化が進めば進むほどそういうものが必要になってきている。

古いものを生かした都市化

ヒットラーが戦争をしたあと、ヨーロッパ共同体の人達が一

方では工業化が進み、都市化が進むにしたがって、都市に住んでいる人はみな、彼の言うには、田舎から来た人だということなんです。だから田舎、地方に対するノスタルジアをみんな持っているはずだと。

そして都市化の問題なんだけど、都市が花で飾られて、イギリスのように草原もあって、そしてなんか、古い時代から住んでいた田園的なものに対するノスタルジアを一方でちゃんと満たすことができるようになっていて、そして都市化やなんかから来る精神的砂漠化を防いでいるわけです。

日本では、そういうことを全然やってないように思います。わずかに盆栽みたいなものをちょっと置いている程度です。しかしあれはノスタルジアを満足させるでしょうか。ノスタルジアよりも趣味化になっちゃいますよ。なにか狭い趣味化、細々としたみじめつたらしいものになっちゃいますよ。もっと堂々と、われわれがかつて生きてきた大自然の中に、ヨーロッパならかつて放牧民族としてすごした時のノスタルジアが都市化と工業化の中にちゃんとたもたれているわけです。

そういう過去のを、ヨーロッパは都市化が進んでいて第二都市を作っていますけど、パリもロンドンも、古い建築物はみんな残しています。日本みたいに、やたらにこわして、そこに新しいものを建てちゃうようなことはしてません。古いもの

を大事に残しているわけです。そしてそれと違った、今まで貧民街であった所をきれいに建て直すとか、もつとそれとは違った所に第二都市を作っていて古いものは古いものとして残している。そういう古い建物があるということも人間の心が不安定になっていくのを守ってくれています。われわれの心から古いものを全部取ってしまったえば不安になるよりしょうがないでしょ。

前頭葉

ヨーロッパには意識の変革が明らかに起こっている。今までは違う時代に生きていかねばいけないんだと、だからこそ過去を大事にしなければいけないんです。これは中国にもあるんです、中国はただ新しくなったわけじゃないんです。過去を大事にしていくことができる状態と、未来に対する希望を持つことができる状態になったんです。過去のものがなければ、そこに母国語も入れてほしいんです。お母さんの言葉というのは過去からずっと続いている言葉です。母なる土地というのも、それがなければ未来は考えられないわけです。ぼくは脳のことを話そうと思っているんだけど、時間がなくてできません。

そのことでロンドンのルネマリパリさんが、自分の部屋にティアール・ド・シャルダンの言葉を大きく印刷したやつだけど、大きく書いてあったんです。そこにあの月から見た地球も

書いてあってね。僕はあの言葉好きだったんだ。だから、昔から知っていた人とめぐり合ったような感じで、ルネマリパリさんの家にいたわけんだけど、二日間過ごしました。なぜ早く帰るんだと言いましたけど、日本人は、ともかくワサワサ歩いて帰っちゃうんです。だから停年になったら行こうと思います(笑い)。

あの言葉はティアール・ド・シャルダンの言葉で、いろんな生物が地球上に生まれて、哺乳類の中で考える人間のできてきたその時点の地球の過去のただ一つの状態を表わしています。実に詩なんです。詩であって科学なんですけれども。ぼくは好きだなあ。それが脳というものであって、同時にそれは前頭葉と考えていいわけです。しかし日本では今、あやしくなっています。水野君も言ったでしょ。前頭葉というものは、死とか、死というものを作るものを考えるのも人間ですよ。死というものの緊張関係で生というものの意味を発見するのも前頭葉の働きです。過去との関係で未来を考えずにいられないのも、前頭葉です。ところが、この前頭葉を子どもたちは当然持っているはずだけど、日本みたいに、過去は全部こわしちゃって未来はないという国では、前頭葉の働く場所はないでしょ。そうすれば日本の子どもたちの心はどうなるでしょう。われわれが、さつき大石さんに感心したのは、本当に日本はどうにもならな

い状態みたいですけど、われわれが何十年かやっていけば日本の自然がきれいになるし、世界の市民としての日本人ができていくんだという、希望を大石さんのように持ちたいと思います。

イワン・イリーチのいう学校

もう時間がありませんが、最後に言います。

これは、パリで探してきた本です。これは去年ロンドンのテリアル・ド・シャルダン協会で、このイワン・イリーチという人が来て話をしたんですけど、それがのっている本です。今まで学校というものができましてけど、もはや学校のない社会を作らねばいけない。学校というものはhumanismをだめにするunhumanなものであって人間を人間らしくする制度になりさがつてしまっているわけです。capitalismの社会の勝利者を作っているだけであって、大石さんとの関係で言えば自然を荒らす人間を作っているのが学校なんです。だから学校というものの中に教育があると考えてはいけません。

中国はこれを少なくともしようとしています。大学も今の状態であってはいけませんね、これをやめるべきだと思っています。直接の問題としては、学校みたいなあの時代遅れの、悪を犯してきたこの学校というものを、幼児の世界までおろしてくるものではないんだというわけです。学校らしくない教育を作

っていく。それを別の言葉でいうと、これも説明がうまくいかないと思います。人間が一緒に生きるということより、生きることを学ぶという学校に変えなければいけない。それには自然というものがあって一緒に協力して助け合っている。一緒に働いているという正しい共同体が生れなければならないんです。

それは全く今までの学校の概念と違うわけなんです。このイワン・イリーチの考えは、ヨーロッパに旋風を起こしている考え方です。彼が数人の人たちとメキシコのクエルナバカというメキシコシティーから一時間くらいの所にあるんですけども、そこであるんな人達と集まって第三世界のための新しい社会ということを考えていた時に出てきた考えで、学校のない社会を作らねばならない。といって学校というものを全部否定しているわけじゃなくて、学校をやっていたものは残していいわけです。これはちゃんと選択をしなければなりません。それから、学校でなくて家庭の中やなんかでやっていた、過去のいいものを拾い集めてそれを作り上げていかなばならないんです。少なくとも、学校という形にはまっていれば、そこに教育があるという考えは捨てなければならなくて、学校というものをなくした社会、そこにこそ本当の教育があるという本なんです。

「めざめている心を讚美する」と

「未来を開発する」

もう一つ、彼のもう一つの本が“Calibration of Awareness”という本だけれども、それはぼくが今日、大石さんが来る前に言った、宗教的なものも含めて、科学的に物を考えるといった意味を含めてawarenessというの、めざめているということです。

「めざめてる心を賛美する」という本をもう一つ書いています。技術が進歩すれば幸福になるだろうか、人がかりの生き方じゃなくて、人間として、感覚、それから直観力がみんなめざめているという人間を讚美しています。そして来年イワン・イリーチが出す本は、「未来を開放する」という本です。学校というものは、今の幼稚園も含めて、学校というのは明治の成功をまだ夢見ていて、あの調子で、もっとエスカレートしていけば、もっと大國になるだろうと夢見ているけど、これは害の方が多くなってきたんです。学校というのは、子どもたちは当然未来を考えることができるはずなのに、未来を考えることを閉じているのが学校である。したがって、彼が来年出すことになっているのが学校である。したがって、彼が来年出すのが教育で、学校は未来を閉め出している所だ。その意味ではみなさんに自信を持ってもらいたいと思うんです。学校制度に

合っている方が幼稚園の格が上だなんて思うべきじゃなくて、学校とは違う型やぶりなものを作っていく。学校はもう死骸なんだ。人間をだめにしている。ここで新しいもの、学校らしくないものを作っていくんだという自信を持ってもらいたいんです。そういう自信を大石さんのoptimismで持ってもらいたいんです。

この他にぼくはちょっとメモを作ったんだけど、これでやめた方がいいと思うのでやめます。これで幼稚園の園長を四年間やってきました、この幼稚園長としてお目にかかるのは、これで終りです。来年からは、もっと違った、もっと中身のある人間として、みなさんにお目にかかりたいと思います。どうもありがとうございました。(拍手)

